

## マタイによる福音書2章13-23節 「民と一つになられたキリスト」

### 1A 私たちと共におられる神 1:23

### 2A ベツレヘムから出るダビデの子 2:6

### 3A ヨセフたちの逃避行 13-23

#### 1B 出エジプト 13-15

#### 2B バビロン捕囚 16-18

#### 3B ナザレ人イエス 19-23

## 本文

私たちは、今、多くのクリスマスの讃美歌をうたい、それから交読文で、マタイ2章1-12節を読みました。讃美歌は、ここマタイ2章1-12節と、ルカ2章前半部分にある話を土台にして、歌っています。つまり、イエス様がベツレヘムで生まれて、羊飼いたちがやって来たこと。そして、東方からの博士がイエス様を拝みに来たことです。確かに、これらが主のご降誕を記している箇所ではありますが、それだけがクリスマスではありません。東方の博士が、贈り物を幼子イエスに献げた後に、この方がヘロデによって殺されそうになって、それでベツレヘムから逃げたということも、クリスマスの話になります。この部分を、まだカルバリーチャペル・ロゴス東京のクリスマスの礼拝でお話したことがないので、ぜひしてみたいと思います。

ある方が、イエスは難民だったという言葉が使われていました。その通りなんですね。世界で今、祖国を失って、どこにも帰属しておらず生きている人々、すなわち難民が大勢いますが、イエス様も、エジプトという異国で幼い時に難民生活をされたわけです。私たちが思い描く、クリスマスのイメージは、確実に商業化されています。日本の人たちの中には「私たちは、キリスト教のクリスマスは祝わない。クリスマスには、どんちゃん騒ぎをするし、男女がラブホテルに行くし…」と言われる方もいます。とても悲しいし、残念なことです。確かに、イルミネーションに照らされた夜の街路はとってもきれいですし、こういった時機もいいなと思いますが、実はイエス様が今、お生まれになって幼子として育ておられたら、そういうところではなく、どこかの寒々とした難民キャンプにおられた、ということでしょう。

### 1A 私たちと共におられる神 1:23

13節から23節を一節ずつ読んでいきたいと思いますが、その前に、マタイが福音書で、この出来事を書いた目的についてお話ししたいと思います。マリアが、処女なのに懐妊したことについて、彼は、預言者イザヤの言葉を引用しています。「マタ1:23 見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。」この方が、インマヌエルと呼ばれます。処女が懐妊するということから、この方

が、人の子だけでなく、神ご自身の子であり、聖霊によって生まれた方であることを示しています。つまり、肉体を取った神ご自身だということです。神が肉体を取られることによって、神の完全な本質の現われを、私たち人も認めることができるということです。

神に対する非難が、人間の間には長いことがあります。なぜ、このような苦しみがあるのか？神がおられるならば、なぜこんな苦しみを許されるのか？その苦しみの最中にある時、神はどこにおられたのか？ということです。かつて、「神は死んだのか」という映画がありました。そこで、クリスチャンの学生に、無神論者の教授が詰め寄る場面があります。彼は、神がないというよりも、神を憎んでいる人でした。自分の娘を早くして病で亡くしたのです。祈ったけれども、聞かれなかった。神はいなかった、ということです。

しかし、それでも神はおられるのです。いや、神は私たちと共におられるのです。ただ、遠い宇宙から、人々の苦しみを見下ろして、眺めているのではありません。その苦しみと一つになっておられるということです。イエス様は、ご自身が、神の国において王となられた時に、国々を裁かれる話をされました。その時に、ある人々を祝福されました。こう言われるのです、「マタ 25:35-36 あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渴いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。」そして、この人たちは、「いつ、あなたに対してそんなことをしましたか？」と尋ねると、イエス様は答えられます。「25:40 あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。』」マザー・テレサが、インドの貧民街で、身寄りのない人々、死にゆく人々に仕えたのは、それらの人々がイエス様だからだと答えたのは有名です。そのように、人々の間に住まれ、しかも苦しみの中に住まれたのです。

私たち人間は、説明するのが好きです。そして、原因を見つけたいと願うのが好きです。なぜ、このような不幸が起こったのか、わざわざ、苦しみの中にある人々に教えようとしています。北朝鮮による拉致事件で、横田めぐみさんのお母さん、早紀江さんはクリスチャンになりました。けれども、滋さんはずっと否んでいました。なぜなら、めぐみさんが行方不明になった後に、いろいろな宗教関係者が横田家を訪れては、そのような不幸になったのは、先祖が悪かったからだとか、いろいろな理由を付けてわざわざ説明してきたからです。幸いなことに、滋さんは、ずっと後に信仰を持ち、洗礼を受けられました。キリスト者であっても、原因探しをする人たちが結構多いです。

しかし、苦しみの中にある人々が最も慰めを受けるのは、実は、共にいるということです。説明でも、原因探しでもなく、共にいることです。私たちの癒しの源泉は、どれだけ信頼しあう間柄になっているか？であります。共に生きる中でその信頼が培われます。神は共に住むために、イエス様を私たちにくださいました。これこそが、クリスマスの最大の贈り物です。

先ほど、クリスマスが商業化してしまったことを話しましたが、実は最近、カトリック教会の神父が、サンタはいないと発言したニュースが流れました。子供をがっかりさせてしまったとして後で謝罪したそうですが、真意はそこになかったそうです。「聖ニコラウスを起源とするサンタクロースから老いも若きも教訓を引き出せるとしたら、それは『つくり出しては消費する』贈り物を減らし、互いに分かち合う『贈り物』を増やそうということだ。」自分たちが消費することがクリスマスではなく、互いに分かち合うことが、サンタの起源になった聖ニコラウスの教訓だということです。私たちは、与えていく時に、共にいることを実感できます。

## **2A ベツレヘムから出るダビデの子 2:6**

ところで、マタイによる福音書は、主にユダヤ人のことを念頭にいれてマタイが書き記したとされています。その理由の一つは、彼らの信じている聖書、その預言がいかにか成就したのかを、他の福音書よりも多く確認しているからです。神が、何百年も前に預言者たちを通して語られたことが、必ずその約束を実現してくださるとユダヤ人は信じています。

ミカという預言者が、次の言葉を預言しました。「5:2 ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」神が、イスラエルの人びとが罪を犯しているのを、裁きを下されることを語っていました。しかし、神はイスラエルの民を見捨てたわけではありません。彼らが悔い改めて、神に立ち返ることを願われ、そして、ベツレヘムから、イスラエルを治める者、メシア、キリストが現れることをこうして約束しておられたのです。ベツレヘムは、ダビデが生まれ育った町です。彼は、エッサイという人の末息子でしたが、まさかこんな小さな氏族から、ユダヤ人の王になる人が選ばれるとは、誰も思っていませんでした。そのダビデに、彼の世継ぎの子が、神の国を治めるキリストになると約束されていました。その方が、同じようにベツレヘムから出てくると、ミカは預言していたのです。

しかし、当時、神の選ばれた都、エルサレムにはヘロデという人物が王になっていました。それで、東方の博士たちが、「ユダヤ人の王を拝みに、やって来た」という話を聞いて動揺したのです。彼は、ユダヤ人ではないのにユダヤ人の王として横暴にふるまっていました。そして、博士たちが、ベツレヘムにいる幼子イエスを拝み、贈り物を献げた後に、夢の中でヘロデのところに戻らないように警告を受けました。別の道で自分の国に帰っていったのです。

## **3A ヨセフたちの逃避行 13-23**

それで、本文に入ります。13 節から 15 節までを読みます。

### **1B 出エジプト 13-15**

<sup>13</sup> 彼らが帰って行くと、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。「立って幼子とその母を連れ

てエジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」<sup>14</sup> そこでヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに逃れ、<sup>15</sup> ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と語られたことが成就するためであった。

主の使いが、「エジプトへ逃げなさい」と言っています。エジプトは、逃避するにはごく自然な場所でした。ローマがエジプトを当時、既に支配していましたが、ヘロデ大王の管轄からは外れているからです。そして、そこには約百万人ものユダヤ人の共同体があったと言われます。そしてイスラエルの歴史を見ると、イスラエル国内にいて逃げている人々の姿が書かれています。例えば、北イスラエルの初代王ヤロブアムは、ソロモンに殺されそうになっていましたが、エジプトに逃げています。マタイは、ホセアの預言を引用しました。11章1節にあります。かつて、ヤコブの家族がカナンの地で飢饉になったので、ヨセフが呼び寄せてエジプトに下りました。やはり、逃げる場所になっていました。そして、そこで四百年ぐらい経った時には、彼らは奴隷状態になっていたのです。その苦しみから神が救い出されました。

ここで、マタイが、イスラエルの民がエジプトから呼び出されたという、ホセアの預言が成就したと言っています。けれども、ここでエジプトに下ったのはヨセフの家族であり、幼子イエスです。ここで、マタイは意図的に、イスラエルの民について語られている預言を、イエス様ご自身に当てはめているのです。この方はインマヌエルです。神と私たちと共におられる、という名が与えられています。イエス様は、イスラエルの民と共におられるようにされたのです。イザヤも預言しました。キリストのことを語られる時に、やはりこの方を「イスラエル」と神が呼ばれているのです。「49:3 あなたはわたしのしもべ。イスラエルよ、わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現す。」明らかに、キリストについて語っているところで、神は、「イスラエルよ」と呼ばれています。

このようにして、イスラエルと一つになられたのが、イエス様なのです。しかも、エジプトという、彼らが奴隷生活を強いられ、そこから救い出されるという、彼らの民族のアイデンティティーとなっていたところと一つになってくださいました。

## 2B バビロン捕囚 16-18

<sup>16</sup> ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かったと激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。<sup>17</sup> そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。<sup>18</sup>「ラマで声が聞こえる。むせび泣きと嘆きが。ラケルが泣いている。その子らのゆえに。慰めを拒んでいる。子らがもういないからだ。」

ヘロデの残虐さは、他の歴史書でもよく知られたことでした。彼は、元々、博士たちからこの子

の居場所を突き止め、殺すつもりでした。それができないと分かると、その生まれた時間から、二歳以下のベツレヘムに住む子を標的にして、みな殺したのです。

そしてマタイは、エレミヤの預言を引用して、これで成就したと言っています。ところが、エレミヤが預言しているのは、異なる内容です。さらに、エレミヤ自身が、「ラケルが泣いている。」と言っているのも文字通りのことではありません。けれども、共通していることがあります。それは、「母親の泣き叫び」です。

まず、ラケルの悲しみを思い出してみましょう。ラケルは、二人の男の子を生みました。ヨセフ、そしてベニヤミンです。ずっと不妊だったところ、神が憐れんでくださいました。しかし、ラケルは、ベニヤミンを生む時に、難産により死んでしまいました。そこが、ラマというところですが、ベニヤミン族の領地になるところです。そこが、エフラテ、つまりベツレヘムに行く道であると書かれています（創世 35:16）。

そして、エレミヤは預言で、バビロン捕囚によって自分の子たちが連れて行かれるのを見て、嘆き悲しむ母親の姿を、ラケルの嘆き叫びと呼んだのです。ネブカドネツアル王が、ユダの民をバビロンに捕え移す時、まずラマにまで彼らを集め、それから連れて行きました。一度集めたところがラマだったのです。したがって、私たちの主は、出エジプトの苦しみの歴史と一つになっただけでなく、バビロン捕囚の苦しみと嘆き悲しみを味わわれたのです。

イエス・キリストの系図を思い出してください。そこにも、しっかりとバビロン捕囚の歴史があります。イスラエル人にとっての苦しみ、またそこからの救いとして最も大きな出来事は、出エジプトと、このバビロン捕囚です。その悲しみを背負って、ユダヤ人は今に至るまで生きています。約束の地から引き抜かれたところにある悲しみです。

### 3B ナザレ人イエス 19-23

<sup>19</sup> ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが夢で、エジプトにいるヨセフに現れて言った。<sup>20</sup>「立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちを狙っていた者たちは死にました。」

<sup>21</sup> そこで、ヨセフは立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に入った。<sup>22</sup> しかし、アルケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くのを恐れた。さらに、夢で警告を受けたので、ガリラヤ地方に退いた。<sup>23</sup> そして、ナザレという町に行き住んだ。これは預言者たちを通して「彼はナザレ人と呼ばれる」と語られたことが成就するためであった。

ヘロデ大王が死にました。それで、いのちが狙われることはないのに、イスラエルの地に戻るように主の使いに言いつけられます。けれども、ヨセフは、自分たちが住んでいたナザレではなく、ユダヤの地に戻ろうとしていたようです。おそらく、ヨセフの故郷の町であるベツレヘムに戻ろうとした

のでしょうか。ところが、ヘロデ大王の息子の一人アルケラオが治めているのを知って、これはいけないな、と思いました。

ヘロデが死んだ後に、三人の息子にイスラエルの地が分割統治されました。アルケラオは、王国の中心になるユダヤと、イドマヤ、そしてサマリア地方を治めました。そして、ヘロデ・ピリポは、ガリラヤ湖の北東部分を受け継ぎました。イエス様は、独りで退かれ、弟子たちを連れて行かれる時、ピリポ・カイサリアなど、この地域が比較的、安全で、ほっとできる場所であったようで、ヘロデ・ピリポは比較的、良い政治をしていたようです。そして、もう一人が、ヘロデ・アンティパスです。これは、ガリラヤと、ヨルダン川の東ペレヤ地方を支配します。彼、ヘロデ・アンティパスが、イエス様が成人になってガリラヤ地方で宣教をされた時に出て来るヘロデであり、彼がバプテスマのヨハネを斬首し、またイエス様が十字架に付けられる時にエルサレムにいたヘロデです。けれども、アルケラオがユダヤを治めている時は短く、彼は暴虐で無能な振る舞いに、ローマ政府自体がしびれを切らし、彼を遠くに追放して、それでその地域はローマの直轄領になったのです。ユダヤ属州と呼ばれるようになります。その都がカイサリアであり、ポンテオ・ピラトが総督になります。

そこで、ヨセフが恐れているのです。アケラオも暴虐な人間であることを知っていたのです。そうして心配しているうちに、「夢で戒めを受けたので、ガリラヤ地方に立ちのいた」とあります。そして結局、彼らが住んでいたナザレの町に戻ります。

そこで、マタイは再び、預言の成就だと言います。「これは預言者たちを通して「彼はナザレ人と呼ばれる」と語られたことが成就するためであった。」と言っています。預言者たち、と言っていますから、複数の預言者です。ところが、預言書のどこを見ても、ナザレは出てきませんね。それは、私たちが日本語の聖書を見ているからです。ヘブル語では、鮮やかに出てきます。イザヤ 11 章 1-2 節を読みます。「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。」イスラエル旅行に行けば、ナザレの町のところに標識がそのまま「若枝」になっているのです。ネツェルと言いますが、それは枝とか若枝の意味です。

若枝、ネツェルはまさにメシアの呼び名になります。しかし、大きな枝ではなく、若枝というのは小さく、目立たないものです。けれども、後に大きくなっていく期待もあります。ダビデの父エッサイは貧しい家庭でした。その中でダビデは末の子で、羊飼いでした。卑しいところから出てきて、それでイスラエルの王となったのです。主も同じように貧しい家庭から生まれました。彼らが献げたいけにえが、鳩であったことからそれがうかがえます。そういう存在が若枝です。イザヤ 53 章には、「53:2 彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。」とあります。

ナザレという町の人口は数百人だけだったと言われています。今、そこには受胎告知教会が建てられています、その敷地に村全体が収まってしまっていたのではないと言われるほどです。そして、ローマの駐屯地があったそうです。それでユダヤ人はローマを嫌っていたので、それでナザレという町は蔑みの対象でした。ナタナエルの言葉が有名ですね、「ヨハ 1:46 ナザレから何か良いものが出るだろうか。」もしかしたら、これが、ヨセフがナザレには戻らず、自分の家系の町であるベツレヘムに留まりたかったのではないか？と思われる理由です。しかし、神は敢えてイエス様をナザレへと戻されたのです。これもまた、この方が卑しめられている者たち、蔑まれている者たちのほうに一つになるためであります。

このように苦しみや卑しめと一つになられた、インマヌエルと呼ばれる方ですが、一つになられたからこそ、神はそこから人々をお救いになることができます。共に住んでおられるからこそ、そこにいる人々を立ち上がらせることができます。単なる同情と、励ましや慰めとの違いはここにあります。同情は、その苦しんでいる人々との距離があります。ああ、かわいそうだね、という思いです。しかし、励ましや慰めを与える人は、その人に同情するだけでなく共感します。まるで自分のことのように気遣います。そうしてから、初めて自分を立ち上がらせてくれる力を持つ言葉をかけることができるのです。

ナザレ人と呼ばれるという預言の続きを見てみたいと思います。イザヤ書 11 章には、この若枝のような方が、なんと世界の王となる姿を描いています。「11:3-4 この方は【主】を恐れることを喜びとし、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、4 正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。」弱い者をさばき、地の貧しい者のために、正しく判決を下してください。悪人に対しては、口のむちで地をうち、殺します。このようにして、神は私たちと一つになり、しかも、弱い私たち、苦しむ者たちと一つになり、それから、立ち上がらせて下さり、ご自身が立ち上がり、世界を裁かれるのです。

しばしば、イエス様が生まれるところだけが注目されて、クリスマスは、かわいらしい赤ん坊が生まれて、それをお祝いする時だと間違えられてしまうことがあります。それよりも、過酷な環境にお生まれになったということが大事な点です。しかし、そこに神からの栄光が、天使たちによって、また星によって示されて、喜びをもたらしたというのがクリスマスです。

まず、光であられるイエスのところに来ることが第一歩です。この方のところに来ないこと自体が、罪と呼ばれます。共に生きたいと願われている神に、どうか背を向けず、向き合ってください。そして、神がキリストにあって、その肉体の死において、みなさんの罪を取り除かれることを信じてください。そして、この方が内に住まわれます。これまでの人生の痛み、苦しみ、今の苦しみのすべてを通ってくださいます。